

学会の発展を願って

日本OR学会 副会長 佐久間 孝

ここ数年、役員として、あるいは委員として、学会活動に積極的に参加させていただいてきた私としての強い印象は、学会がもつ発展への危機感でした。

昭和54年頃は、私も参加させていただいて会員増強方策が検討されましたし、昨年は、学会創立25周年を記念して、長期計画が検討されました。現在の学会活動にしても、学術会議にわれわれORワーカーの専門領域を確立する努力が続けられていますし、国際的な活動を発展させるためにアジア地域のOR学会連合の設立が目論見られています。また、ORの普及をはかるために、OR事典の事例集の改訂版が大変なご努力で発行されましたし、ORワーカーの後継者育成のために、昨年から学生論文賞が新設されました。今回の特集「これからのOR」にしても、学会発展の危機感から、OR誌を通じて、学会員がORの将来をともに考えていこうとする編集委員会の意図があるように感じられます。

この危機感はどこから生まれてくるのでしょうか。

現在の社会をみると、中近東にせよ、フォークランド、グレナダにせよ、国際情勢は緊張のただ中にあります。2回にわたるエネルギー危機を乗り越えた日本経済も、景気回復の明るさをむかえています。貿易摩擦は激化するでしょうし、財政赤字の解消は容易なわざではありません。軽・薄・短・小といわれるように構造変動の波もおしよせてきています。このような不確実な社会においては、行政にせよ、経営にしても、たえず多くの問題が解決をせまられています。とすれば、問題解決の科学であるORがもっと社会的に活用さ

れてしかるべきなのに、どうも今ひとつであることは否めません。

また、現在は、情報処理技術、特にハードの技術のめざましい発展によって、高度情報化社会に変貌しようとしています。このような社会のもとでは、動力機による産業革命が労働節約・生産集約として機能したのと対比して、情報節約・意思決定集約として機能するように思われます。このような機能を発揮するためには、意思決定を支援し、知識処理するソフトとして、ORが最大限に活用されるように思われますが、これも今ひとつであるように思われます。

このように社会的には、ORの活用、理論的な発展が望まれているのに、その期待に充分答えられない歯痒ゆさが、学会の危機感をもたしているように思われます。そして、30年の歴史のもとで、ここ数年、会員数2000にサチュレートしている客観的事実が、この危機感をより現実的なものとしています。

そこで、本特集が学会発展のための問題提起の場、ブレーン・ストーミングの場を提供するものであるという認識から、一学会員の立場から学会発展の方策を、思いつくままに列挙してみることとします。

学会の発展は、基本的には研究活動を活発に実施することにつきます。当学会の初期にも、各種の当時新しかったOR手法の適用が活発に議論されたことが思い出されます。研究活動の活発化は新しい理論なり手法の開発が大きな役割をはたしています。数値解析の分野で、有限要素法の開発がはたした役割が大きかったことは、皆さんご存じのところす。

このように考えると、ORの分野においては最近、めだった新手法の開発がないことが学会の停滞につながっているのではないかと考えさせられます。特に、ORが問題解決の科学であるという点からすれば、分析手法を具体的な課題に適用し

その解析の中から分析手法が改良され、新しい分析手法が生まれてくるものです。すなわち、理論と実証とのピンポンボールが積極的に行なわれるところからこそ、ORの研究の発展がはかられることとなるでしょう。たとえば、環境問題をはじめ、その他の分野でも新しい総合評価方法の開発が望まれています。

研究の発展のために、現在でも論文誌が発刊され、レフェリー制度もきめ細かく実施され、学問的権威を高める努力が払われていますが、研究発表会などでも、他学会などでも実施されているように、重要な研究課題については、40分位の充分な発表時間をとって、数人のコメンターも置いて十分に討論を重ねるような研究発表の場があってもよいように思われます。また、学会における研究の場である研究部会にしても、近々常設の研究部会を設置しますが、このような場で充分時間をかけた研究が進められることが望ましいと思います。なお、従来の研究部会にしても、研究期間の限度をこえてなお研究を進めたいグループについては研究グループとして学会として認知することにしておりますので、このような小集団活動を活発化することによって、学会が活性化していくことが必要かと思えます。しかし、発想の変換のためには、ある一定期間の間を入れて、メンバーも入れ換えて研究することも、必要なことかもしれません。

学会の発展にとっては、研究の発展を基本とすることだけでなく、ORの普及、実践をはかることも重要な課題です。デミングなどによって導入された品質管理が、その後日本の経営風土に密着して総合品質管理TQCへと高められ、今日の低成長、不確実な社会のもとで、経営の総合化、組織の活性化の手段として広く産業界で活用され、ひいては逆に海外に輸出されるまでにいたっていることは、ご存じのとおりです。統計的品質管理を基礎におきながらも、経営の中でそれを具体的

に展開する手だてなり考え方を明確に形式化していったところに、この管理手法が広く活用され、定着化した一面があるように思われます。

それにひきかえ、ORはビッグ・ビジネスでさえ、一部の人の活用の範囲にとどまっていることは、現在の品質管理の発展をみるにつけ、強く反省させられるところです。一時はORという言葉自体が普及をさまたげてきた一因かとも考えましたが、TQCが慣用語として広く使われている現実を見るにつけ、ORがあまりに数学的に説明され、OR的思考について十分に説明されることがなく、簡便に、現場でも利用できる手続にまで簡便化する努力に欠けるものがあつたように思われます。56年以降わが国でのOAブームが続いています。真にわが国の経営風土に定着するには、なお時間がかかるとは思いますが、むずかしいトップ層の意思決定を助けるためのORの活用ももちろん必要ですが、生産なり営業なりの現場での意思決定に簡便に利用できるORの普及も重要なこれからの課題だと思われます。

また、学会が現在社会的に関心の高い課題を選んで、それにORを適用して、その結果を政策提言するのも、必ずやORの普及に役立つこととなるでしょう。

思いつくままに、最近の所感を書きつづってきましたが、2000人という小人数の集まりですが、経営から数学、土木、電気…非常に学問領域の広い人たちの集まりであり、しかも良識ある、きわめて親密な集まりであるところにこの学会の特長があります。常に危機感をもって、学会の発展を願うのも、この良識のあらわれです。学会の発展を願いながらも、この特長だけはぜひ引き継いでいきたいものです。